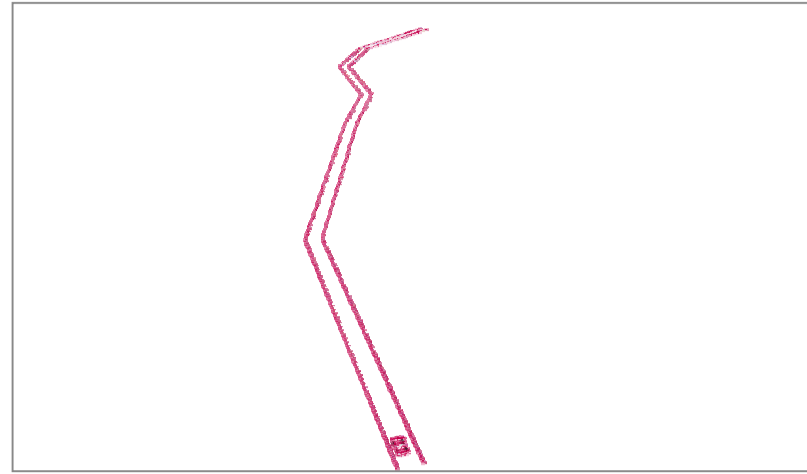


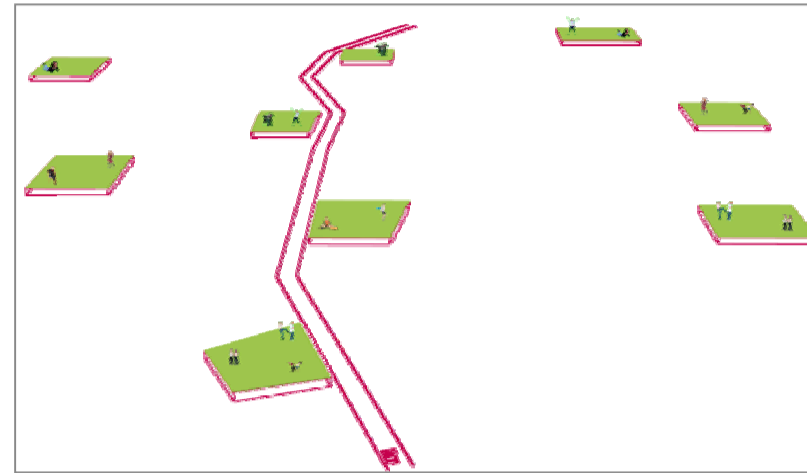
# concept

全国的に増加する耕作放棄地の住宅利用、上部空間のパブリックスペース化

イメージ図



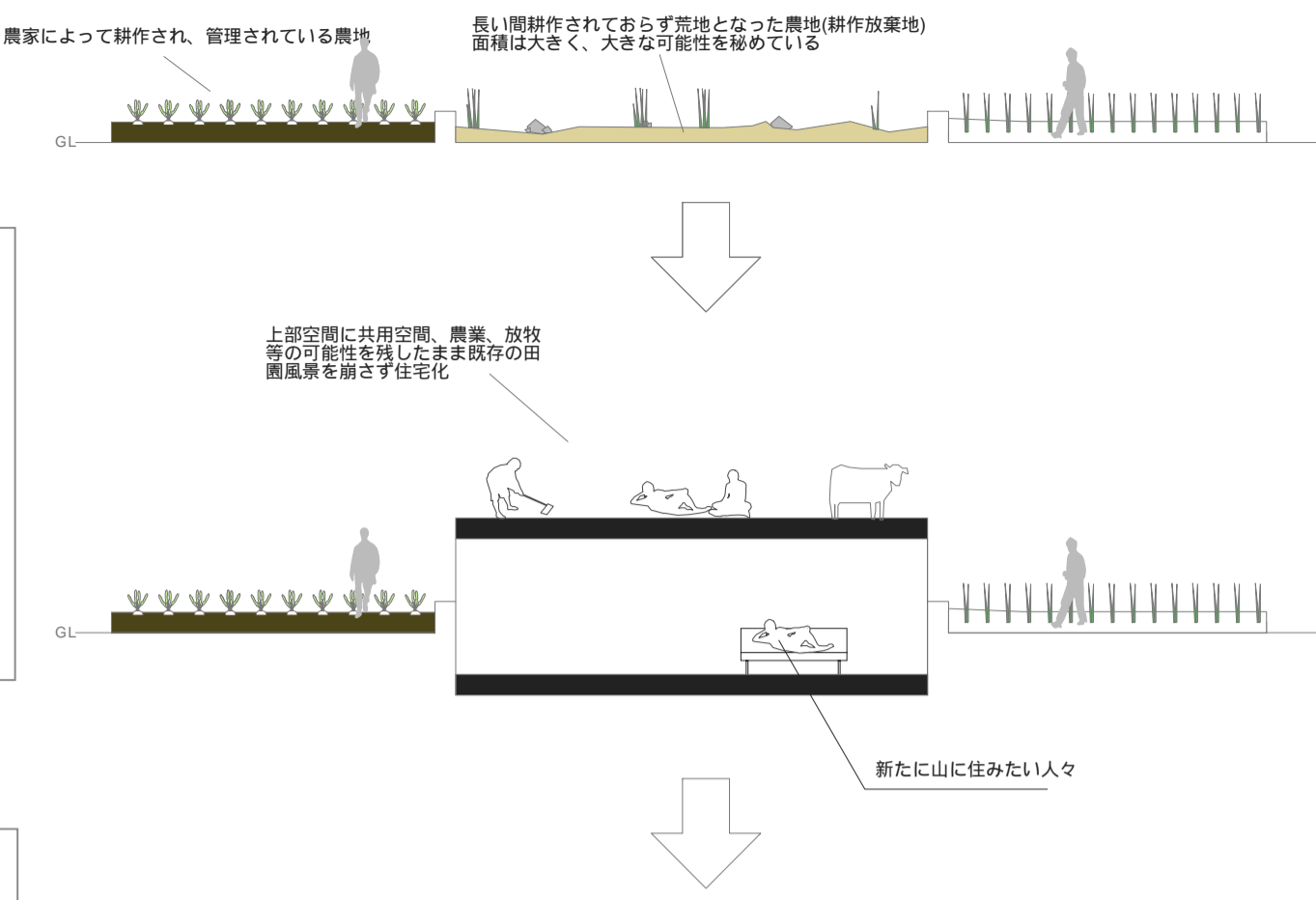
しばしば「村社会」と皮肉られるように、壮大な自然とは真逆に関節的な風景が続く山間部の農村。一般人が立ち寄ることのできる場所は少なくひたすら車で走ることしかできないため、せつかくの自然を立ち止まって楽しむ場所も少なく、大自然の中に置き去りにされたような孤独感を感じる。



そこで放棄され荒地となった耕作放棄地を今回の計画に沿って再生することにより閉鎖的な空間にパブリックな空間が浮かび上がる。住宅は半地下になっているため既存の田園風景を崩さない。また、もともとの土地代が安価であり、さらに行政の支援を得るため必然的に家賃が安くなるのに加えて都市環境が安定するための空間的なゆとりを本質に設計することができ、新たに農業を営まない人や山間部への居住を希望している人々にとってこの住宅は非常に魅力的である。

再生された住宅への人材の呼び込みによる労働力の増加、パブリックスペースにおける山間部と都市部の人々との交流、自然との触れ合いによりこの農村の環境は持続的に保存され続ける。

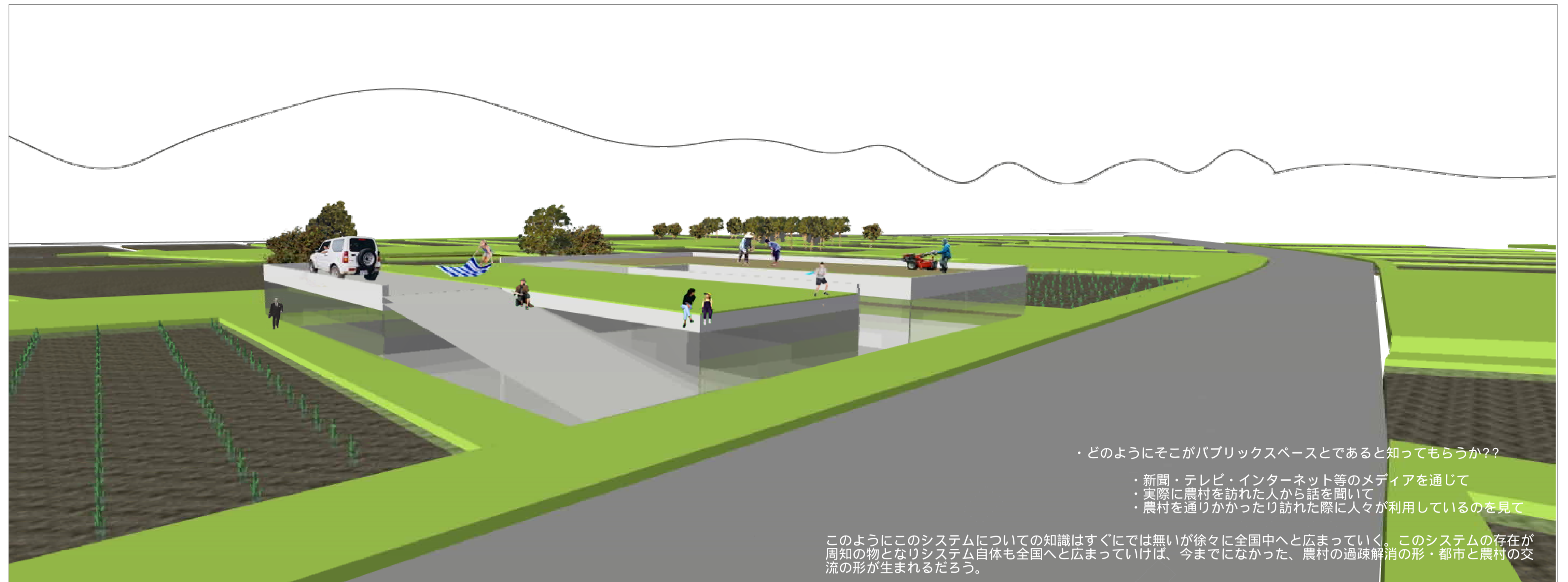
メカニズム



- ・パブリックスペースにより閉鎖的な村からオープンな村に
- ・都市と農村の人々の交流する空間の確保 都市労働者の山村・農業についての理解、勧誘による新規就農者の確保
- ・大きな産しの空間 観光客の増加
- ・安価で住みやすい住宅 新規就農者の入居による労働力の増加
- ・耕作放棄地の有効活用による農産物生産量の増加
- ・荒地の再生により悪い景観をなくす

活気のあるオープンな村になっていく

外観パース(イメージ)



住宅を半地下にした事により田園風景を壊さず、また高さがそれほどないため通りすがりの人、車にも立ち寄りやすい空間となる。またこのパブリックスペースはGLよりいっくら高い位置にあるため、山間部の住人だけでなく一般の人々が見てもすぐにそれとわかるようになっている。屋上のスペースは住宅の居住者が農業・放牧などを行うスペースと誰でも立ち寄ることができるスペースとに分かれる。耕作放棄地を再生した住宅の屋上に農地・放牧地とパブリックスペースを両方配置することにより現在は少ない都市と山間部の人々の交流が生まれ、村全体が活性化していく。

# パブリックヴィレッジ -耕作放棄地再生計画-

site: 鳥取県倉吉市関金町

コンセプト

今回このプランを提案するにあたって、現在の山間部の二つの問題点に着目した。一つは、現在全国の山間部で急激に増加している「耕作放棄地」。過去一年間耕作の実態がなく、今後も耕作をする意思の無い土地のことである。特に中国山地における耕作放棄地の増加は近年著しく(全国一位の増加率である)。この増加は加速する農業の衰退をそのまま表していると言ってもいいだろう。耕作放棄地増加の原因は、主に労働力の不足によるものであり、人口の都市流出による過疎化と深い関わりがある。

二つ目の問題点は、山間部の田園にはせっかく広大な緑である農地が広がっているというのに、農地は農家の私有物であるというイメージがあり一般人は入ることができず、一般人が山間部を訪れた時に立ち寄り利用するスペースがあまりにも少ないことである。広大な緑を感じる空間、車から降りて少し休憩したり農村の人々と交流する空間などの不足が、一般人の山間部に対する興味を失わせていているのではないだろうか。

今回提案するのは、上記した二つの問題点を一度に解決する計画である。

無駄になっている耕作放棄地を行政が所有者から安価で買取り、半地下の住宅を建設して安価で販売・賃貸し、上部の空間を一般人が立ち寄れるようパブリックスペース化、同時に農業、放牧などに利用する。(何をするかは放棄地の面積により決められる)

安価で買い取った土地に住宅を建て安価で賃貸し、労働力を増やすと同時に山間部のパブリックスペースをつくり、そこは都市と農村の人々が交流し農業の面白さや素晴らしさを伝える空間、人々が山や田園の壮大な緑を感じることで癒しの空間となる。

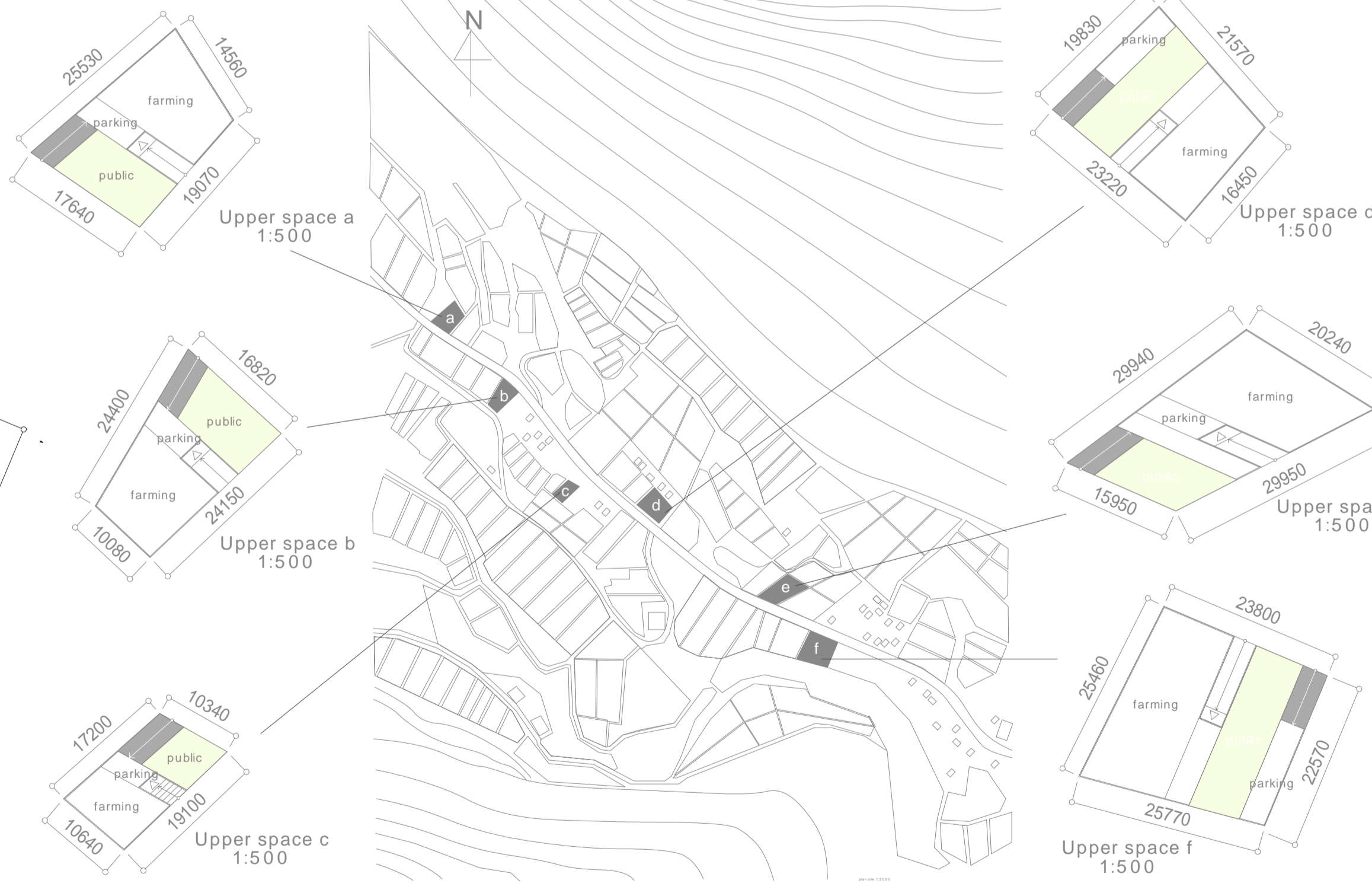
このプランは農業衰退に歯止めをかけた行政側、新たに農業を始めたい人や定年退職し山間部に住みたいが経済的に不安のある人々、そして山間部を訪れる都市部の人々のニーズが噛み合った画期的な計画ではないだろうか。

平面図の一例 (plan F) 1:200



一つの敷地に入る住戸数は敷地の広さによって決まり1~4戸である。敷地の耕地であったという特性を利用して平屋でかなり広いスペースを取ることができるため、高齢者や子供にとっても非常に住みやすい空間となっている。

敷地計画図 1:3000



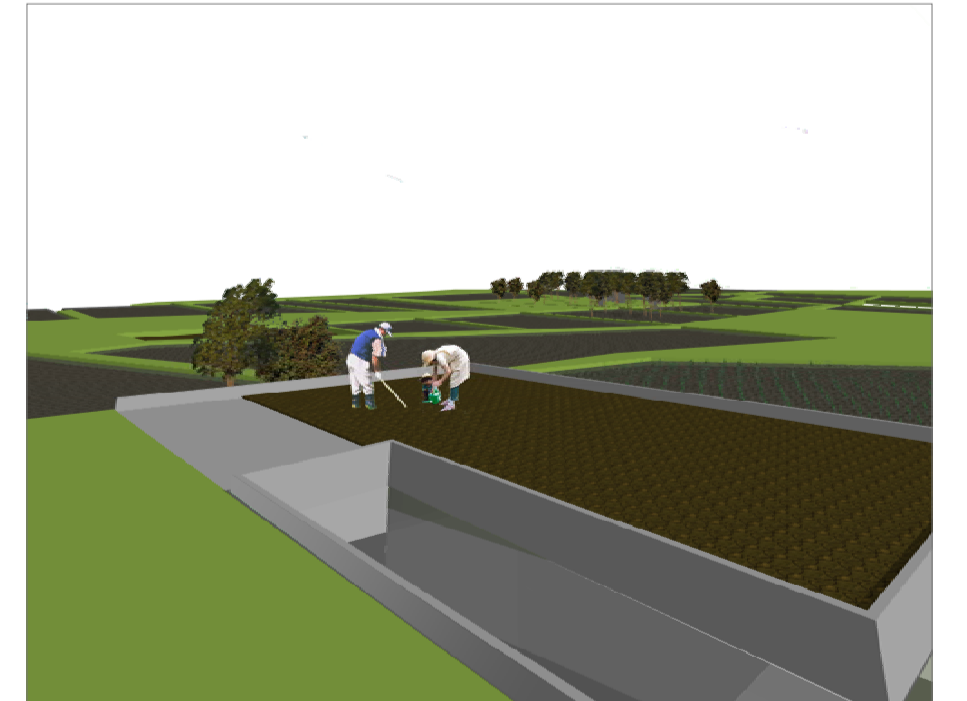
今回の計画は全国の山間部でもどこでも成立するシステムであるが、例として鳥取県倉吉市関金町を敷地として設定した。敷地は山間部の典型的な過疎化が進行する農村で、中心に地方の主要道路が走るにもかかわらず、一般人の立ち寄りスペースはない。実際にこの計画がこの農村で行われたら、という想定で6つの敷地を選び再生計画を立てた。

内観パース(イメージ)

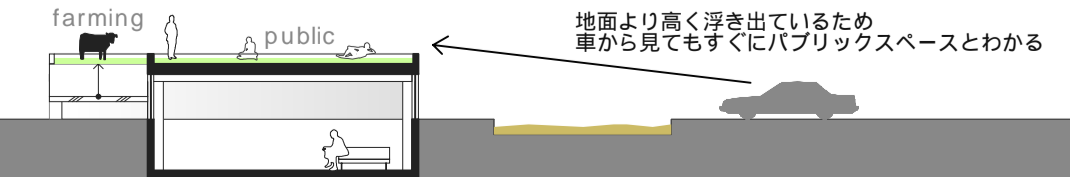
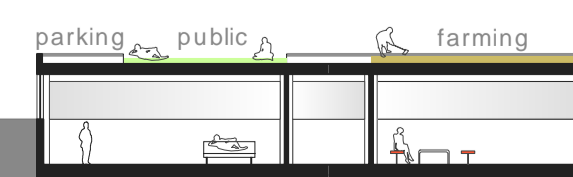


住宅内は外部の人の生活レベルから一段階下がるため光を多く取ってもプライバシーが保たれる。また半地下、屋上緑化により室内は一年中安定した環境が続く。

交流の発生



パブリックスペースと農業用地を同じ屋上にとることにより、耕作をしている住宅では農業の体験、放牧を行う住宅では家畜との触れ合いといった都市と山間部の人々の交流が自然に発生する空間となる。



section A-A' 1:300